

対峙する「こころ」と「からだ」

性同一性障害の当事者に聴く

上川あやさん

「Trans-Net Japan」運営メンバー

山路明人さん

「Trans-Net Japan」運営メンバー

聴き手 中村 正

人間科学研究所学術フロンティア推進事業プロジェクトによる一連の企画「当事者のまなざし 紡ぎなおしの物語を聴く」の6回目です。今回の当事者は、性同一性障害を持つ人ということで、「Trans-Net Japan」という当事者アドボカシー組織の運営メンバーである、上川さんと山路さんに来ていただきました。当事者が悩みながら仲間をつくり、社会に訴えながら相互に課題を共有しあい、活動している取り組みや生きられた経験を聴くことで、人間科学を勉強している者として、同時代を生きる者として、何か課題を引き出せるかなと思っています。プライベートなことに話が広がりますが、そのことを無視しては当事者に聴くという意味は出てきません。真摯にお二人の方が話をしていただくこととなりますので、聴いている私たちも、それに応答する責任があると思います。まずは、ここで話されたことは、ここだけのことにしておいてください。写真撮影や録音もお断りします。この問題はよくわからないことが多いと思いますので、正確に理解することも聴いた者の責任かと思っています。お願いします。

上川あやさんの話 性の移行の物語

当事者の上川あやです。リラックスしてください。私から紹介した方がいいのかな。彼は私のパートナーで山路明人君です。ご紹介があったように、性同一性障害という「こころ」と「からだ」の性が一致しない、食い違うことに苦しみ、

昔から悩みを持ってきた二人です。私は戸籍上の性別は男性です。この5年くらい、女性として就労もしています。社会生活全般も女性として暮らしています。彼は私とは逆パターンです。戸籍の性別は女性ですが、社会的に暮らしている性は男性で、彼は会社でも男性として勤めています。私たちはパートナーと一緒に暮らしています。

何から話そうかな。質問は適宜聴いていただいて。ライフヒストリーから。私は上川あやで現在35歳です。27歳までは、ある固い公益法人で、男性サラリーマンとしてネクタイを締めて働いていました。中村先生にお会いしたのは、男性として社会生活を続けていくことに絶望し、会社を辞めて、どういうふうに分らしくしたらいいか、自分探しをしている時期でした。私は今、女性として暮らしています。戸籍上は男性です。この生き方を知った人からよく出される質問は「いつから女性だと思うようになったの?」。これに対して「こうだから」と根拠を指し示すことができないんです。それは翻って考えると、皆さんに「なぜ女性だと思っているの、男性だと思っているの?」と言うと、体の構造的なところに根拠を簡単に求められると思いますが、こと「こころ」に代えてみて「あなたのこころは女性、男性なの?」と言われると、何を証拠にそれを差し示していいのかわからないのと同じはずです。いつも同じ質問を浴びせられるんですね。

「なぜ女性だと思うようになったの?」「なぜだかわからない。自然にそういうふうを感じるようになった」としか言えなくて、他の人は、こころとからだが一致する以上、そういう質問が浴びせられることはないし、自分たちのこころとからだが一貫していることが当たり前という見地に立ってみると、不思議なことだと思うんですが、私の視点から見ると、こころがどういうふうを感じるのかという重さにおいては、性同一性障害という、こころとからだの食い違いを持っている私たちと、そうじゃない人々との間に「どうしてもそういうふうにはか思えない」という感覚そのものの高低はないはずだと思います。改めて聞かれると答えに困るなという質問を私たちはいつも投げかけられている。それに対する答えを探そうと思っても、なかなかいい答えが見つからない。同じ質問を質問者に投げ返しても答えは返しにくいのではないかと考えています。

私は東京に生まれて、そのまま東京で暮らしていますが、自分にとって性の違

和感がどこから記憶にあるのか。幼少の頃の記憶は朧ろげです。私の記憶にはないことですが、今、こういう生き方をしている、母親に「昔の私はどうだったの？」と聞いた時、母親が「そう言えば、あなたは『女の子に生まれればよかった』と言って『なんで？』と問い掛けたら『子どもが産めるから』と言った」と。私の記憶の中にその言葉はないんですが、男兄弟の真ん中で、兄と弟に挟まれて、戸籍上は次男の立場で、家族で肉体的な女性は母親しかいない。でも何か、私の中に「どうも兄と弟とは違うのではないか」ということがわかっていました。幼少の自分の心では、何と言葉で説明したらいいのかわからない。でも私を男の子として家族も周囲も扱う。「男の子なんだから何々しなさい」とか、兄と弟が興味を示す草野球とかラジコンとか飛行機に私は全く興味がなくて、男兄弟が見る「ミラーマン」とか、男の子がよく見る番組を見てもピンとこない。私は自分が違和感を感じていることが、自分に特有のことなのか、他の男の子にもあることが、よくわからない。そういう意識がどこかにありました。何か違和感がある。周りから扱われることもおかしい。「僕」と言われてもピンとこない。自分のことも「僕」「俺」と言えなかった。一人称を抜いてしゃべることを子どもの頃からして、その理由は自分でもわからなかった。

小学校に上がった頃、男の子が男の子同士で遊んだり、女の子は女の子同士という、少しずつ分かれ初めていくのですが、私は男の子の間にも、しっかり馴染めなくて「どこか違う」感じがする。彼らと話を合わさないといけないと、子ども心にも敏感に思うんです。私、野球で1回だけヒットを飛ばしたことがあって、もともと興味がありませんが、打った瞬間に3塁に走った人間なんですよ。1塁に行かずに。それくらい野球オンチだったりするんですが、「どこの野球チームが好き？」と聞かれると、男の子の間にもいけないという気持ちから、子どもの頃の私は迷わず「巨人」と答えることにしていて、「周りからおかしいと、思われないうちにしなきゃ」という、そういう意識は自分の周囲の子どもたちのコミュニティの中でも、親を取り巻く大人たちの間にも「自分の位置づけを、どう見せていくか」ということに腐心していたところがありました。

私にとっての性の違和感が差し迫ってきたのは、中学校に入って第二次性徴を迎えたことと初恋をしたことでした。この二つは12歳の時だったのですが、健康

な男性だったら当たり前起こる身体的変化はわかっているんです。何もおかしなことではなく、それが自分にもやってきたということは理屈ではわかっているのに、自分の真の部分で「絶対に違う」という感覚があるんですね。「絶対認められない、すごく嫌」という気持ち。体毛が生えてきたり、髭が生えてきたり、喉仏が出てくるのが嫌で、今は喉仏は手術で削っているのではないんですが、顔を上げるのさえ嫌だと。家族の前でも短パンは絶対に履かない。体毛が生えているからだ嫌だと。声変わりをするのも嫌で、高いキーで歌い続けられる練習を密かにして。ちょっとクライですね、こういう話をすると。そういう中学生でした。

今は、いい大人になったからか、ファジーに「世の中いろんなことがあるよね、白と黒だけじゃないよね」と思うんですが、中学校の頃は白か黒かをつけたがる。自分を突き詰めて考えてしまうところが自分にもありまして、それが思春期の一つの典型かもしれないですが、私は自分が感じているフィーリング、「自分が本当に好きだなと思うことを素直に出したらおかしく思われるのではないか」という恐怖のもとに育って、その恐怖を誰かと分かち合ったり、それを吐露したりする対象者を持たなかったので、自分自身が嘘つきなのが嫌で、自分を否定したい気持ちが強かった。本当の自分を周りに表出していない。曲がりなりにもニコニコ話せる人はあったんですが、「私は皆にウソをついている。ここにいる人は本当の私を知らないんだから」と本当の友だちは一人もいない、そんなふうに思っていました。

初恋が同時期にありました。私の場合は男性が好きになったんです。私は生得的なからだの形は男性だったわけで「男性に生まれたんだよな、違和感があるけど、男の子なんだよな」と育ってきて「あなた、男、女、どっち？」と言われたら、自分では釈然としないものの「男」と答えるしかないと思っていたので、その人のことを好きなんじゃないかと気がついた瞬間、男の子に生まれて男の人が好きっていうことに、自分で愕然としたんですね。よく子ども相談室で「同性に惹かれるのは思春期の一時的な傾向であって、そのうち戻るんだよ」という話を聞きかじっていたんですが、私の中では確信的に「これって、絶対変わらない気持ちだ。一生誰にも言わない秘密を持った」と突き詰めて考えたりしました。

私は当時、からだの性とところの性を分けて考える概念が頭の中になくて「し

っくりしないけど、男の人なんだよね」と思っていたので、男に生まれて男が好きなのは同性愛者だ。自分が何であるかを持たないことはすごく自分が不安で、どこか足場が不安ということがあって、どこかに「私はここにいるんだ」という座標軸を探そうとするんですけど、当時の私は単純な図式に当てはめて「男性同性愛者、ゲイなのかな」と思って、自分を「男らしくない」と思っているも「男らしくしなきゃ」とも思っていました。中学校、高校、大学と曲がりなりに普通の男子学生として、高校は男子校で、高校までは詰め襟を着て生活をしていました。自分の心の中の違和感、身体的なことに対する自分のからだへの嫌悪感はずっとあったんですけど、それとうまく向き合うというよりは、自分で、どこか、それにふたをして生きることを選んでいたんですね。

私は初恋以来、好きになる人は男性だったので、男性として学生生活を送りながら男性を好きになって、でもその人には私は男性として扱われて、不快で、不適切感があって、でもそれを甘んじて受け入れて男の子を演じるしかない。そんな感じだったので、好きな人に対して「好き」と言うてはいけな思っていました。自分の好意を伝えて拒絶されると、余計自分がみじめになる。そういう恐怖感があって、感情表現を手放しにできないで来ました。

テレビのニューハーフの番組で「夜の接客業に聴く」とかを見ると「彼女も私と同じ当事者なのかもしれない」と思うんですが、そういう人はおもしろおかしくテレビでは扱われている。私は自分に近いものを直観的に感じるんですね。「この人たちが持っているものと自分は近いんじゃないか」と、どこかでわかってたりしたのに、同じテレビ番組を見ている家族の表情を観察すると、彼らは「いいじゃないか、こういう生き方だって」という感じではないんですね。何かある種「享樂的に生きている人たちだ」と、どこか冷笑、シニカルな視線を家族が持っていて、自分の中に抱えている自分のあり方を表に出すことは、社会との摩擦、家族との摩擦を生むのではないかと思っ、それを出せないという気持ちが続いていました。

高校3年生の時、男子校でしたが、こういうことを言うと、ナンセンスな言葉に聞こえるかもしれないですが、私は詰め襟を着て男子学生をしていたんですが、私のことを好いてくれる男性がいたんです。何がナンセンスかというと、私が感

じていたのは、私が詰め襟を着ていようと、男子学生としてそこに在籍していようと、彼は私の中に「女」を見てくれたんだなと思った。外見的には男子校の同級生が密かに付き合いをする。一緒にいる時は、彼は私を女扱いする。私はそう扱われることがしっくりきて「自分がしてほしいことと、彼がしてあげたいことって、こんなに合致するんだ」と初めて思った。しかしどこかで「これはすぐに消えてなくなる行為なのだ」。結婚できるわけでもないし、彼は幸せにできる地盤がないことはわかったことなので「これはいつか終わるんだ。終わる覚悟でいないといけない。どっぴり漬かっちゃいけない」と思っていた。1年近く交際が続いたんですが、彼に他に好きな女性が現れて、その恋愛は終わったんですね。「どっぴり漬かることはやめておこう」と思っていたんですが、失恋したことがすごくショックで「私らしくいようと思っても、それは永続する形にならないんじゃないか」と絶望したんですね。

彼との関係で「自分が自分らしく」していた部分は自分の根幹にかかわる部分だった。自分らしくしゃべれたし、自分らしく笑えた。失恋が余りにもショックだったので、自分のこのころのあり方を誰にも言えず、思春期、幼少期を過ごしてきて、そこでうめき声を上げるように、初めて母親と親友に言ったんですね。整理されてはなかったんですが、私は男性に生まれて男性が好きなんだから同性愛者だと思っていた。同性愛者というカテゴライズはわかったんですが、「自分でもなぜかわからないけど、男性しか好きになれない」と母親に言うと、母親の第一声は「なぜかしら驚かないわ」だったんですね。私は「曲がりなりにも男兄弟と自分は変わってはいけない」と思っていて、演じることがあったのに、母親はどこかが、ピンと気がついてた。それを言葉として確かめたわけではなかったんですが、「男性しか好きにならない」と言うと「なぜかしら驚かないわ」と言ったこと自体に、母親は驚いていたんですね。母親は「そういう人もいるよね」と言って「別に誰かに迷惑をかけているのではなければいいんじゃないのかな」と言ってくれた。親友にも言ったんですね。私は、その時に親友の言った一言を覚えてなかったんですが、親友はこう言ったんだそうです。それは10年くらいしてから聞かされたんですけど。「それって、こころが女だってこと？」と聞いたんだそうです。その時に私は「多分、そうなんだと思う」と言ったらしい。その後

も27歳まで「同性愛者なのだろう」と心の逡巡を繰り返していたわけです。

高校3年生、17歳～18歳の時、初めてカムアウトをして、それで楽になったのかというと、一時的に傷の膿は出すことができたけど、古傷はずっと痛むことは続いていました。大学に行って、好きな人が現れて「好き」と言えなくて男の子を演じたり、就職活動をする時にも「サラリーマンになりたくないな、ネクタイを締めたくないな」と思ったけれども、就職する時は、バブルの絶頂期で、経営学部に行ってたんですが、営業マンで金融とか証券とかバリバリ、その当時で言えば花形、今は斜陽なのかわからないですが、そういうところに皆、身を投じていくわけですね。私は一人、サラリーマンとして自分が生きていくことに何の展望も見いだせない。「なんでこんなに重苦しいんだろう」と思っているけど「社会のルールに乗るしかない」という意識が根底にあるんですね。何となく社会のルールに押される形で、ある公益法人のサラリーマンになりました。そこで5年間、ネクタイを締めて働いて、夜の接待にもつきあい、出張を繰り返して、台風が来たら「女の子は帰っていいよ」と言われて、私は夜中まで残って残業して、男の子らしくしゃべる。男の子らしく、意識しないとできなかつたんですが、それはしないといけないと思って、座る時も足を開いて座るということを意識したんですが、そんなことをしながらサラリーマンをしていました。

そういう生活を続けながら、無意識のうちに自分の存在意義を確かめたかったんです。何で確かめるか。仕事に没頭して評価をされる。自分が他者から評価されることで、自分で自分を評価していなかったことを、どこかで埋め合わせしたかったのだらうと思います。極端なワーカホリックになって、会社で鍵を締めて帰るのは私、家に帰ると家族は寝ている。家を出る時は家族が寝ているという生活を5年間していました。そういう生活をしながら始めに現れたのは多汗症で、汗が止まらない。手がベタベタし、足がベタベタして、3分おきに靴下をトイレでこっそり捨てて、買ってきた靴下を履き替えてニコニコしながらサラリーマン生活をしていました。5年間の間にいるんなことがあったんですが、円形脱毛症になって、それを発見すると分け目を変えたり。ニコニコ仕事をしていても、十二指腸潰瘍を患って、胃が痛くておなかを抱えていて、何か胃に食べ物を入れないと痛みが納まらない。過食になって食べ続ける。多分、周囲の人は私を順風満

帆に思っていて「悩みなさそうだね」と言われて「そうだね」と自分でも言いながら、でも自分の悩みの根幹の部分に蓋をして、どこか麻痺させていたと思うんです。自分でも絶えず重苦しいんです。何が重苦しいのか蓋を開けてようとしません。精査しようとことをしない。それでも「男として暮らすんだ」という前提条件は無意識に掲げていて、でもからだがついてこなくなって、漢方に行ったり、気功に行ったり、針に通ったり、医者を転々として、今で言う心身症、こころのストレスからくる、からだの不調の数々だったということですが、心療内科に行くことは気がつかなくて、対症療法だけを求めて何も解決しなかったということです。

「仕事を辞めようかな」と思って、青年海外協力隊のセミナーに行ったりして、なおかつ自分の存在意義を「男としてどこに位置づけるか」を探そうと思って、そんなことをしている時に、ふと思ったんですね。「なんでこんなに苦しいんだろう」。理由がわからずに一人きりでポツンと自分の部屋にいと涙が止まらなかつたりしたんですが、ふと閃くように「何が苦しいんだろう。そのことに蓋をしてきたのだ」とハッと気づいた。「自分が何であるか」ということが、いつもわからずに「どこか不適切な感じがするのに、それに目を向けずに来た。それに目を向けてみようかな」とその時、初めて思ったんですね。27歳だったんです。

私にあったヒントは「私は多分、ゲイなんだな」と思った。新宿2丁目は男性同性愛者の人たちが世界でも最も大きいのではないと言われるコミュニティを形成している町です。私は東京在住なので気軽に行ける。そこで自分の欲望をどうしようということではなく「自分が自分であることを他者と共有したい」。自分が持っているフィーリングを「そうだよ」と言える人に来て来なかったことが辛かった。「ゲイなのかもしれない、それを確かめてみようか」と思って2丁目に行って「友だちになってください」と片端から言ったんです。すごく気味悪がられまして、ある意味で正攻法でしたが、友だちができなかった。ある時、コミュニティの中でのミニコミ紙を発見して「サークル特集」にバレーボールをやるゲイのサークル、吹奏楽をやっていますというのがありました。友だちをつくらうと思っても、私自身の中に男性同性愛者のコミュニティが、どんなものかということが判然と描けていなかったし、自分が属したことがないコミュニティだ

ったので、どこかに恐怖感がある。おいそれと入っていくのは怖いと。サークル特集を見て「これが健全そうだな」と思って「ゲイのハイキングサークル」に入りまして、箱根八里をハイクしたりしたんですね。ハイクをしながら、私は自分が誰にも言えなかった悩みを、ここでこそ言わんと意気込んで行ったんですが、「自分が持って生まれたからだと、どうしても認められなくて苦しい」とか、男性に惹かれると気づいた時、直観的に「これって多分変わらないよ」という、思春期の一過性のものではなく、私にとっては変わらない思いです。その時に思った確信めいたことなんですが、そういうことを共有しようと思って話すわけですが、彼らの反応は芳しくなかったんです。

彼らの論法はこうなんです。「男性に生まれたことを、なぜ否定する必要があるの。男性が男性を愛して何が悪いんだ。お前さん、男性に好かれて女になろうなんて、なんで迎合する必要があるわけ？」と言われて「私は別に男性に受け入れてもらいたいためにからだを変えたいとかではない。からだに違和感があるだけで」という話をして、向こうは「わかんないな」と腕を抱えてしまって、私も「わかんないな」と頭を抱える形で、何かわかりあえないんですね。自分が共有できるスペースを探そうと思って参加したんですが、どうもそうじゃない。「私は一体、何者？」という振り出しに戻ったんです。でも自分が抱えているものは性的少数者、セクシュアル・マイノリティに存するものであることはわかっているので、自分にとっての情報源は「パラ族」とか「アドン」などゲイ雑誌とかだったりしまして、ゲイ雑誌を定期的に手にして情報を得る。

ある時、「性転換者を知っていますか？」というコピーが目飛び込んできたんですね。「自分は何なのか」ということを探していて、それを見た瞬間、「多分、これは自分に近い」と確信めいて思って「絶対、この勉強会に参加しよう」と思って参加しました。その時には中国で性転換したという、私と同じパターンで、男性から女性に性転換した方が話者として立っていて、性の違和感、自分のからだに対する違和感を抱えていた人たちが、ゲイ雑誌の情報を頼りに、その場に集っていた。ただ私は「自分が何であるか」ということを整理して掴めていたわけではなかった。彼と同じパターンと、私と同じパターンの人が混在していたわけですが、私にとっては自分が抱えてきた問題、男性から女性側に行く指向性しか

頭の中になかったので、彼と同じパターンの人を見た瞬間、「何かすごく無理して男らしくしているな」と思って「なんでこういう場で、むりに男らしくするんだろう」と思って、その人に「あなたも女性になりたいのですか？」と聞くと「私は逆です」と言われて、目がテンになったりしました。

そこに参加したのが26、27歳の時で、そこで知り合った友だちは今も続いています。その友だちと、この間、しゃべった時、「その時のことを覚えている？」「覚えているよ」「今まで溜めこんでいたことを、とにかく聞いてもらいたいとしゃべっていたよ」「そうだったんだ。記憶にない」と言いましたが、とにかくもそこにいて、私はうれしかったんです。「初めて自分の思っていることを素直に聴いてもらえる」「同じ目線で話せる人がいる」と思って。それに参加した当初は、まだサラリーマンをしてネクタイを締めて働いていました。彼らと友だちになり、彼らと自分を対比することで、自分が悩んでいたことが何なのかということが整理がついてきた。「こころの性」と「からだの性」と分けて考えみると簡単に整理がついてしまう。自分が抱えてきたフィーリングは「女に近い」と言えば、確かにそうじゃん。からだの構造上の根拠がなかったから、自分は「こころ」と「からだ」を分けて考えてあげることが自分にできていなかっただけで、分けて考えたら確かに「からだは男性だよ」と思っている。でもフィーリング、感じ方は「女性に近い」と思った。

自分の「こころの器」=からだだが、当時、27歳で、男性化していくわけですよ。そういうことの一つひとつが嫌でした。私は今、女性ホルモンを打っているのですが、表層上、女性らしさは薬によって女性に近い形にメンテナンスをされているわけですが、27歳の男性にどういう変化が現れるか。剃り込み型の髪の毛が変わってくる。もう、ものすごい恐怖。髭が多いというのが恐怖で、毎日30分かけて髭を抜いてたんです。何をやっているんだろうという感じなんです。ワーカホリックで夜中まで仕事をして髭を抜く日々というのも。そんな生活を送っていて「自分が何なのか」ということが整理されてくると、二つの道に分かれるような気がしました。

一つは男性として、そのまま生きていく。与えられたからだに沿って生きていく。もう一つは自分のこころにしたがって生きていく。まず一つ目。「からだの性」

に沿って生きていく生き方。それは今まで続けてきたきサラリーマン生活、男性としてのルールを走っていくことです。私は周りから順風満帆と思われる生活をしていました。仕事は面白そう、飛び回って、いろんな人に会って、普通のサラリーマンでは会えない人と会って、いろんな会議も参加して責任も任せてもらって仕事をしていた。5年間勤めると、仕事の面白さはわかり始めていた。お金には困ってない。自分が買いたいもの、車とかパソコンも買えたとし、表面上、友だちとも仲がいい。「悩みがないね」と皆から言われる。でも私は自分は何かを見つめてみると、虚構の人物を演じているんですね。「自分自身ではない」と思えてくる。結局、自分を殺して社会との軋轢を避ける生き方。そういう生活なんですよ。

もう一つ「こころの性」にしたがって女性として生きる。その当時、私は誰からもみても男性として存在していて、特に男性が女性に移行していく過程は、世の中の冷やかな目とか、テレビに出てくるニューハーフに起因するのかな、おもしろ、おかしく生きる「性を選択しているのではないか」という見方です。しかし私にとって、性は選択しているものではない。この違和感自分が選んだものではなく、存在したに過ぎないのですが、外からは選択したように見られる。「こころの性」にしたがって生きる時、家族の理解は得られるか。今までつきあってきた人間関係はどうなるんだろう。仕事を続けていくことは難しいだろうな。家族に迷惑をかけたくないから家を出ないといけないな。その頃は「性同一性障害」という言葉もなかったですよ。お医者さんもいなかった。その当時あったのは「ニューハーフで働く人たちがいるよね」ということと「今日は何本ホルモン剤を打つの？」と気軽に聞く、ある意味で、いい加減なお医者さん、それでも活路を見いだして注射をうちに、ホルモン剤をもらいに行く当事者たちがいるという、それだけのフィールドがあるだけでした。

二者択一を考えた時、私は一方の男性として生きていくことには絶望していた。どっちにしても究極の選択だなと思って、男性として生きるトライアルは十分してきたと思っていました。苦しくて仕方がなかった。「どっちにしても苦しいんだなと思ったら、自分らしく生きようかな」と思ったわけです。そう思いながら、はじめは気楽にホルモン剤を始めたんです。ホルモン剤を入れた瞬間に思ったこ

とは何か。自分のからだの男性化が進行していく。おじさんになっていくということが嫌で嫌でしょうがない。自分が自分でないようなからだの自分。「そのネジを逆に巻き戻していくことができる」と思うと安心した覚えがありますね。しかしその安心は一瞬でした。からだは女性化が始まる。胸が大きくなって、腰周りに脂肪がつきはじめて、肌が少し白くなって、ニキビができなくなって、どこか少しふっくらしてくる。女性の体脂肪の分布に近づいていく。自分が嫌でしよくなかった男性的特徴は遠のいていく。しかしそれはとりもおさず、自分が男性として家族のもとで暮らし、友だちとつきあい、会社に席をおいて、男性として働くという今までの基盤を危うくする。そういう危険を伴っていました。ホルモン剤を入れて数か月して、胸が膨らみ始めたんですが、それでも会社は辞める必要はないかなと思っていて、家族の前でも俯き加減に胸の膨らみを隠してサラリーマンをしていた。ある日、健康診断の日程表が回ってきて、それを見た瞬間、「辞める時が来た」と何か閃くように思った。単純にそこにしがみついたところで、男性として生きていくことは、苦しくて仕方がないことを続けることでしかない。翌日、辞表を出しました。

ホッとしたんですね。男性として自分を演じることは必要ないと思って、ホッとして一週間、家族も今までワーカホリックで家にいつかなくて「久しぶりだね」と兄弟から言われる生活だったので「気楽にやれば」と言われたけれど、一週間もすると形勢が変わるんですよ。「どうするの?」。私はそれに対する答えは自分では持ち合わせていない。ホルモン剤を打ち始めたけれども「女性になれるのかな」。何の自信もない。座標軸、道筋も見えてこない。サポートグループもない。取り組んでくれる医者もいない。ただ「ホルモン剤、今日、何本打つの?」。1本で十分なのに何本でも打ってくれる医者がいるだけという。私はこれじゃだめだなと思って「家を出ないと家族に迷惑がかかる」と思った。シンガポールは性転換、正確には性別適合手術をやっている国立大学で専門医の方がいる。そういう先生がいらっしゃるって知っていたので、東南アジアフリークでシンガポールは何回も行ったことがあるし、最低限の英語があれば何とかかなるかもしれないと思って、新しい世界に踏み込むんだと。いろいろ調べて現地に行って何とかかなるんじゃないかと思って、シンガポールに観光で入ってアパート探し、学校探しをして、

留学生になって、性転換の専門医のもとを訪ねて、ホルモン剤をもらってということをやっていました。

なぜかホルモン剤は全く効かなくて、男性化が元に戻ってくる。半年間、進展しないままでした。シンガポールのコミュニティは日本人が3万人いて、オーストラリア大陸にいる日本人と同じだけいるんですが、3万人の日本人がいながらもムラ社会で「サンヨーの誰々さん」と言うと「東芝の誰さんと友だちだね」というくらいつながってしまっていて。シンガポールのコミュニティにいても周りとの軋轢を避けながら「性の移行」をするのは難しい。専門医がいてもアクセサブルではなく、なかなか会えない。シンガポールを諦めて、日本に帰ってきて、サンフランシスコにいこうと下見に行き、トランスジェンダー、「性の移行」する人たちのコミュニティにいくと、充実してきているんです。3日ごと、10日ごとにとサポートグループが次から次に開かれる。いろんな方と話ができて、癒される時でもあったんですが。彼らが言った言葉はこうでした。「あなたがきれいに変われるなら大丈夫よね。でもここは偏見が強い社会であって、ここで移行することは、殺される危険があることを覚悟しなさい」。実際に、アメリカではヘイト・クライム、つまり、無理解、憎しみによる犯罪で「性の移行」する人が、月に一人殺されていると言われます。有名な『Boys don't cry』という映画が一昨年ありましたが、彼と同じパターンの人で、生得上のからだの性が女性であることが周囲にわかって輪姦され、殺されるという実話をもとにした映画です。そういうことが実際にあり得ると。

私はどこに行き「自分らしく生きる」ことを模索したらいいのかと思っていました。そんな時に、埼玉医科大学が「性転換、性別適合手術を正式な治療としてやるかどうかを検討し始めている」というニュースが流れまして、日本でもそういう道筋ができるのではないかと一筋の光が差し始めた時期で、その医療側の動きを受けて、サポート側も形成された。私たちのTNJというサポートグループ、性の移行をしようという性別違和感を抱えている人たちが情報交換、悩みの共有をするサポートグループが立ち上がり、殺される危険があるアメリカより、せせら笑われても、殺されることはないだろうという日本で「性の移行」をしようと思ったわけです。

3年間「性の移行」にかかりました。私はワーカホリックで仕事をして性の悩みを忘れようとしていた側面があったので500万円くらい貯金があったんです。バカみたいにお金を使ったんですが、なぜか貯金が残るくらい働いていました。3年間かけて、自分が嫌でしょうがなかった男性的な特徴、体毛とか髭、私は喉仏を削る手術を受けたんですが、自分が自分らしくあって落ちつけるからだになるための医療措置を受けたわけです。私は女性としてのライフヒストリーはそれまで持っていなかったもので、女性として社会と溶け込めるのだろうか、そういう不安があって、電車に乗ると「私はどっちの性に見られているんだろう」と思うと恐くて、女の子同士がしゃべったりしていると「あの人はどっち？」と私を見ているのではないかという恐怖感にさいなまれて、いつも俯いて電車に乗っていました。そういうことを繰り返していました。

なかなか自分の「性の移行」が進まないことが嫌だなと思って、何かきっかけがほしいなと思った。ある時、男性との出会い、男性に女性として認識されることで自分を磨くことを企みまして、あるデートをセッティングしたんです。デートの相手は、私が男性として生まれているという過去を知っているという前提で会うことになったんですが、女性としてのアイテムを持っていないので、中村さんと私を結んだ女性の友人に相談したんです。その友だちが「それだったら家に来なさいよ」と彼女が女性の服とメイクをしてくれた。何年間か「性の移行」をして、医療措置を受けたり、ホルモン剤を自分のからだに採り入れたりしていて、後は積極的なトライアル、土台をつくって、土台の上に「何を塗りますか？」という作業ができてなかったんですが、そこで初めて洋服を着替えて、メイクをしてみたら、彼女たちは優しいから「似合うよ」と言われて、鏡に向かって「なんだ、そんなに变じゃないじゃん」と初めて思えたんです。その日を境に「女性役割」を積極的に採り入れることの日々が、だんだん増して行って「性の二重役割」が半年くらい続いたんです。実家にいるに際しては「男の子」としていないと近所に対していけないと思ったので、ロン毛の兄ちゃんみたいにして、なるべく声も低めに挨拶をして、隣町のショッピングセンターのトイレにボーイッシュな恰好で入って行って、そこで女性の服に着替えて、パウダールームでしっかりお化粧をして出ると、すっかり女に変わるという、パウダールームでいっぺんに変わ

るという恐ろしいことをしていたんです。

「女性らしく暮らす」ことを模索しようと思って家を出ることに決めました。家を出て、その日から女性として暮らし、周囲のアパートの人たちは、私を女性だと思っていたと思います。事情は何も言っていませんでしたから。ただ不動産会社には住民票を出さないといけないので言わざるをえない。泣き落として「家族に迷惑をかけたくないから家をどうしても探したい。協力してください」と家を見つけてもらって、そこから半年して、お金がなくなりました。本当に社会に自分が入っていくしかない。やっていく自信はないけど、トライアルしないといけいない。女性として社会で生活をするための努力はすべてやったんだから、あとは踏み出さないといけいない。お金がなくなると踏み出せない、勇気のない私でした。踏み出して、派遣会社に登録して、女性として派遣されたんです。戸籍上の性別はいいませんでした。1週間の派遣だから気楽にトライアルと思ったら、その会社に2年間勤めて、その後、また2年間、他の出版社に勤めまして、去年、その仕事を辞めて今に至っているんです。

社会で女性として扱われる、女性として周囲で接してくれる友人ができて、今はより自然に、何の疑問もなく「自分は女性だ」と思える自分がいるんですね。前はどこか、そうじゃない、何に根拠を求めていいのかわからないということがあったんですが、自分の身のおきどころはどこか。「女性」と「男性」のどこか境目があるのだと思いますが、それが間違いないという地盤を固めて、今は「女性だ」ということを疑わずにいられます。私は幸い、家族に受け入れられている。こういうことに関して家族から拒絶されることはすごく多い。勘当される人もいます。家を探すのは難しく、正社員にもなれない。公的書類に「男性」というのがついて回るので、年金制度にも加入できないで正社員になれない。家を借りれない。病院にかかれない。健康保険証も「男性」になっているのでトラブルになる。選挙にも行けない。そんなことをしながら暮らしています。今の社会状態は何とかが変えたいと思って、声を上げ始めています。

中村 上川さんに初めてあった時は、彼女は、まだ彼だったんです。「性の移行」期でした。見事に女性になったと思います。「性の移行」期の話は面白いなと思

ました。次に話していただく山路さんとお会いするのは2回目です。上川さんと会った時は、彼女はまだ一人だったので、山路さんのことは知りませんでした。それでは、山路さんに、ライフヒストリーを含めてお話を、お願いできますか。

性の移行の物語 山路明人さんの場合

怒濤のように相棒がしゃべって、私はかなり無口なんですけれど。私は今、30歳です。某地方で生まれまして、親の仕事の転勤が多くて、一つの町に1年半から2年くらい住むというサイクルで育ってきました。6歳上に姉がいるんですが、私とは違って女の子らしくて、レースのブラウスの襟が好きで、スカートもフリフリで、全然正反対なんです。私は昔から髪が短くて、短パンを履いて、男の子と遊ぶという感じで育ってきました。母親が看護婦なんですけど、余りにも姉と違うので「もしかしたら、この子は半陰陽かもしれない」という可能性を考えたらしくて、幸いなことに母親から「女の子らしくしなさい」と一回も言われなかった。父親も男の子が欲しかったようで、私が男の子用のロボットとか、ガンダムのプラモデムを欲しいと言うと、ホイホイと買ってきて一緒に遊んでくれる父親だったのです。小学校を上がるまでは「女の子らしくしなさい」ということがなかったので「男」「女」を意識することなく育ってきました。小学校を上がって、母親が、結婚式に行く時に「今日はハレの日だからスカート履きなさい」と言われるのが嫌で「履きたくない」と言って大喧嘩をしたり。そういうことはありましたが、スカートを買っても履かないので、勿体ないということで、親もズボンしか買わなくなって、ほとんどズボンで過ごしていました。

「人と何かが違う」と気づいたのは、小学校5、6年の時、「女の子が好きなのかな」と思ったんです。その時ははっきり「好き」ということはなかったんですが、中学校1年生の時と、バスケットをしていて、他の人は名字とか名前を呼び捨てにするのに、ある一人の女の子だけ「何々さん」と呼ぶ自分に気づいたんです。「もしかしからその人のことが好きなのかもしれない」と思って、自分は一応女性で生まれたので「女で女が好きなのだから同性愛なのかな。同性愛とは何だろう」と思って、町の図書館に行って調べた。そうすると「思春期の一過性のも

のなので治ります」と。「一時的なものなのかな」と思ったりしたんですが、私も多分、「男性を好きになるということはないんじゃないかな」と思っていて、とにかく女性に惹かれる。「自分は同性愛者なんだ」と強く思って「このことは誰にも言っちゃいけないのかな」と思いました。

からだのことに対する違和感は、私は第二次性徴が遅くて、中学校1、2年生で女の子は生理がきますが、高校に上がる寸前に生理がきまして、やっぱり女性のからだを持っていて「女性なんだ」と認識しました。痩せていたので、胸が大きいとかなかったので、女性らしくなるからだが嫌でしたね。何で嫌なのかよくわかりませんが、自分は女性のからだに惹かれて、女性の胸が好きだったり、女性らしいラインは好きなんだけど、自分のからだに、それがあるのは許せない。自分のからだを鏡で見ることも嫌で、顔から下を見たくない。中学校の時、近所の人に「山路ちゃんは、笑うと可愛いからいつも笑ってなさいよ」と言われて「可愛い」という言葉に過剰に反応して「これからは絶対に笑わない」と無愛想に笑顔をなくしたりしました。自分が女性として見られることに違和感がある。からだに関して違和感がありました。

スポーツ推薦で高校に行きました。女子高だったんです。いろいろ悩んではいませんが、悩みに直面しないように、スポーツに打ち込んでいて、スポーツをしていれば、髪が短くて、ボーイッシュでも誰も何もおかしいと思わない。周りの人もそんな感じの人が多かったので「変わった人」と浮き上がることはなくて「スポーツをしているからそうなんだ」と周りとの摩擦はなかったんです。でも中学校、高校を通して、女の子の友だちができにくい。教室でファッション雑誌を集まってみて「この服がいい、こういう口紅がいいわ」というのに全く関心がない。なぜ盛り上がるのか理解できない。興味もない。女の子の友だちのグループに入ることもできず、かといって男の子のグループに入って遊ぶこともできず、友だちが少ない。運動してましたので、部活とかクラブの友だちと朝から晩まで一緒にいる生活でした。スポーツの場を離れると親友と呼べる友だちは一人か二人しかいなかったのではないのでしょうか。

高校は寮生活で女子高だったので周りは女の子ばかり。共同生活ですから、お風呂が共同なんです。その時に、さらに自分のからだに嫌悪感を感じる。他人に

自分の裸を見られることがこんなに嫌なんだと気づいて、お風呂に入るのがストレスになって、女の人と共同生活をするのがストレスフルで、スポーツで怪我をしたこともあって、1年入院して、留年して高校に行ったんですが、スポーツ推薦で入っているので、学校からも「転校したらどうですか」と言われて高校を中退したんです。親から反対されて「それでも辞める」と。両親は高校も苦労して出た人なので「辞めるなら自分で生活しなさい」と、そのまま17歳で独立しました。仕事をしないといけないと思った時、最初に頭に浮かんだのが「女として働きたくない。男として働きたい」。男で働けるように面接を受けようと。たくさん面接を受けたんです。その当時は、昨日まで女子高生なので、髪は短いですが、どう見てもボーイッシュな女の子です。女性として採用するのはたくさんあったんですが、それでは嫌なので、男として働ける職場って、どこにあるんだろうと自分で考えて、肉体労働とか、深夜勤がある仕事、絶対、女の人が来ないような業種の面接を受けたんですが、「うちは女の子採ってないから」と男性職で採ってもらえなくて、たまたま1件だけ、おじいちゃんが経営しているスーパーがあって、見た目が男の子みたいだったから「採用」と言う感じで、そこで社会的に男性で暮らすことをスタートさせることができたわけです。ただ私を「男」だと思ったのは社長だけで、周りの従業員は「男の子で入ってきた、あの人、変だよ。オカマなんじゃない」と毎日、陰口を叩かれて苛められて帰って毎日布団を被って泣いていました、2年くらいは。それでも罵倒されても「男性として暮らしたい」という気持ちの方が、今、振り替えるとなつよかったのだらうと思います。

その時に、仲良くなった方がいて、食事しながら「女性として暮らしていくのはとても苦しい」という話をしたんです。その人が、一言「やってもみないのに、なんでそういうことが言えるのか。女性として社会的に暮らしたことがないのに、なぜできないと思って決めつけてしまうんだ」と。そう言われると「それもそうかな」と。「女性として社会に生きてきたことがないのに、なぜできないと思うのだらう。女として暮らしてみよう」と考えて、いきなり女性自衛官になりました。2年間、女性として自衛官をしていました。仕事は適性検査の結果、整備員が向いているということで、F1とかファントムを飛行場で作業服を着て飛ばすという肉体労働の仕事を2年間続けました。自衛隊は定年制と任期制があって、任期制

で2年で1回サイクルで辞めるという形です。社会的に女性で暮らすというのを自衛隊でスタートさせてんですが、わからないことがたくさんある。最初に躓いたのが、ストッキングを生まれて初めて履いたことです。自衛官の制服があって、トイレでストッキングをどこまで下げるのかわからなくて、悩んだあげくに、隣の人にコソッと「ストッキングはトイレの時、どこまで下げるんですか？」と真面目な顔をして質問をして「それは人それぞれじゃないですか」と言われて、その人それぞれがわからなくて「やっていけるのかな」と初日に思ったのが強烈でした。パンプスも生まれて初めて履いたんです。10分くらい履いていると足の先が痛くなって歩けない。「女の人はこんなに大変なんだ」と。女性して生活するというのが努力しても、しっくりいかない。感覚がわからない。一つひとつ2年間で確認したことは「女性で生活するのは自分ではむり」というのが結論でした。

自衛隊を辞めた後、高校を中退したので、働きながらやっていける単位制高校が自分の地域にあることを知って通い始めました。その間に「自分は男性なんだ」と思い始めまして、自分が自分のままで生きるためには、仕事をするのは難しいだろうと思い、資格をとろうと。大型免許とか大型特殊、トレーラー、危険物取扱主任とか独学で取りました。車は軽自動車しか乗ったことはなかったんです。普通免許をとって。大型免許も教習所でバックになっているのは高い。教習場に行くお金がないので、外から金網ごしに、どういうふうに皆が運転しているのか、仕事帰りに毎日見て、練習しているコースは検定のコースと一緒に、それを続けて、タイヤの動きとか、どのへんでタイヤを切っているかを覚えて、一発試験を受けて受かりました。その時、調子にのってトレーラー免許もとれるんじゃないかと気楽に思った。トレーラーは大型自動車と違って、前と後ろが離れているので難しい。それも金網ごしに見て、タイヤをこう切ったら後ろの台車がこう動くんだと学習して、一発試験を受けて、偶然受かったんです。そのまま運送会社の仕事をずっと続けていました。その時、23歳くらいですね。

仕事は力仕事でした。ホルモン剤も何も打たないで男性として社会的に暮らしている。きれいで、きしゃで、女の子っぽい男の人という感じでした。23歳になると、回りは男らしい、同い年の人も年下の人も男らしい人が多く、だんだん浮いてきているのに気づきまして「このままホルモンを打たないでやっていくのは

むりだろうな」と思っていたんです。自分の周りに性同一性障害の友だちがいたか。地方だったのでいなかったんです。友だちとして付き合いがあるのは「オナベ」と言われる店に勤めている子たち。その人たちはホルモン注射をしている人もいたんですが、私は、ホルモン剤を打ってどうなるのか、わからない。男性化するのわかってても、打っている人に聞くと「ホルモン打つと寿命が短くなる」という情報しか持ってないわけです。そういう話を聞いていたので、ホルモン剤を打たないで、できるところまでやっていきたいと思いました。からだの違和感があったんですが、ホルモンを打たない状態でできるところまでトライアルしたいという気持ちが強くて、自分のからだの嫌悪感を抱えながら、でもホルモンも打たないで頑張ってきた。しかし社会との軋轢が生まれる可能性が大になってきた。情報が欲しいと思って、東京にいったら情報があるのではないかと思って、横浜に家を移しました。

どこかの公共施設で、すでにTNJという自助グループが立ち上がっていて、ティーズキッチンという自助グループもあって、そこのチラシがあったんです。それを見まして「何か怖いけど一回くらい参加してみよう」と。その会はいっぱなし、聴きっぱなしの会で、その部屋で話したことは部屋を出たら忘れるという会でした。緊張して行ったら、上川が遅れてきて、そこで初めて会ったんです。昔は「TSとTSを支える人々の会」という正式名称でしたが、「そういう自助グループがあるよ」ということで参加してみました。机に座っているところに遅れてきて座ったのが上川だったんです。そういうことからパートナーシップをとるようになったわけです。

聴く時間

中村 「Trans-Net Japan」は当事者組織で、権利擁護のための組織です。ライフヒストリーを話していただきました。『多様な「性」がわかる本』（高文研）という本があります。伊藤悟さん、虎井まさ衛さんが編集されています。虎井さんは「Trans-Net Japan」の運営メンバーです。その中で上川さんも、自分の体験を書かれています。上川さんが彼から彼女になっていくプロセスがご両親の話とともに

感動的に書かれています。今日のテーマは「対峙するところとからだ」としました。最初に二人にお願いしたいのは「戦場としてのからだ」としたのですが、ラジカルすぎるということで「対峙するところとからだ」として「性の移行」のプロセスの中で、対峙しながら、選択をしてきたという、お二人のお話だったと思います。「性同一性障害」という言い方もいいのかどうか、これも聞いてみたかったです。世間で流通していますが、ご本人に確認すると「これでもいい」ということですが、本当にこれでいいのか。「性転換手術」というのも適切ではないのではないか。「性転換」というのはある種の魚が環境に合わせて性を転換する能力のことですね。性転換手術というのがいいのかどうか。

私たちはマスコミを通じてしか、このテーマに出会っていない。当事者に出会っていない。ニューハーフとしてマスコミに登場する事柄とかを通じてこの種のテーマに出会って、歪められた言葉、知識を持っている可能性がある。何がいいのかは、当事者によっても違うと思います。二人のお話を聞くと、私たちが生きている、男であること、女であることの自明性がゆらぐんですね。彼だったか、彼女だったのかと常に考えます。今日は、そういう人がカップルになっている。もともと違う戸籍上の性別を持っている。私にとっても頭がクラクラする話です。自明性、当たり前だと思われていることが、当たり前ではない体験をしている。一つひとつの事柄にいろんな問題が宿ってくる。「こころ」と「からだ」が対峙していない人の場合、考えられないデコボコ、ギクシャクが、日々のディテールに出てくる。性同一性障害と言っていいんでしょうか。性同一性障害とっていますか。何と云うのがいいんでしょうか？

山路 自分のことを「性同一性障害なのか？」と言われるとどうか。確かに性同一性障害という言葉ができて、対社会、対人間には説明しやすくなって、その部分は助かっているし、「自分は何者なのか」を見つけるためには、その言葉があることは賛成です。ただ「私は性同一性障害を持っている人で」と言うのは、医者がそういうならそうなのかという感じますが、個人的には「性同一性障害を持っている人」という認識ではないんですよ。

上川 性同一性障害という概念に触れたことで、自分自身を整理しやすくなったことはあって、性のあり方は自分自身の個の根幹にかかわることで、他の方も同

じだと思いますが、そういう混乱に対して自分で整理できなかった。言葉ができたことで、自分が日々生きていく上で不安定で「自分は何なのか」ということを常に問い続けることから、少し楽になったかなと思います。私も彼も自分が望む性にしがって生きているわけですが、WHO（世界保健機構）の疾病分類に「性同一性障害」というのが入っていて「同性愛」は疾病分類から外れています。彼らが病気とされないことは歓迎で、私たちも病気とされることはどうなのかということは確かにあるんですが、ただ病気とされることによって、私たちが望んでいる医療が提供されるという、逆に診断がなければ自分たちが望む形、本来の自分に戻る努力ができないことは、すごく辛いことなので、社会に対して、それを納得してもらうために、私たちが望む医療を提供してもらうには、彼らの立場を守る意味でも診断の基準、医療の手助けがあるのであれば、疾病に類するものであるということは、ある意味では必要悪かなと思います。

中村 いい言葉がなくて、難しいのですが。お二人の背後にあるコミュニティの人たちのリアルな言葉、それを伝えるリアルな言葉でないということでしょうね。やむをえず医療を受けるための必要悪というのがミニマムな共有かもしれません。二人のことを性同一性障害者ということに躊躇したんですが、タイトルをつける時になかなか伝わらないので悩むところです。言葉が丁寧に使われていかないとだめかなと思います。先程の本の最初に語句の説明が書いてあります。相手に対してどう言う言葉を使うかは大事なことです。MtM、MtFも、それぞれ違う経験となります。ジェンダー・クリニック、ジェンダー、セクシュアル・オリエンテーション、トランス・ジェンダー、トランス・セクシャル、性別再指定手術などのキーワードがあります。いろんな言葉があって、それを理解しないと十全な理解になりえない。

今の話のなかにてできた「偽りの自分」というのがあります。それを抱えて生きることはどういうことか。26、27歳になって初めて安定するポジションを得ていくまでの苦しみ。そのあたりがよく出ていたなと思って聴かせていただきました。皆さんともやりとりをしたいと思います。失礼かなと思うようなことでもいいかなと思います。ここまで苦労してきたので、多少の失礼さに慣れているということで、よければ質問をしてほしいと思います。

質問 上川さんに。小さい頃からお化粧品に興味を持つとか。女の子らしいことをするとか土台になるものがあったのかどうか。もう一つは、FtMとMtFの性の移行の中で、決定的に違うことはあるのでしょうか？

上川 一つ目の質問から。違和感の感じ方とか、いつから感じ初めたとか、私がお話したのは、必ずしもすべて典型ではない。小学校を上がる前にお母さんのスカートを履いていたかと、口紅を塗っていたとか。姉のスカートを履いて家の中で過ごしていたという話はよく聞く話ですが。私の周囲に女姉妹がいなかったこともありますし、そういうことをすることが、社会的にどういうふうな受け止められるかという差別感を内在化していたことがあって。今はスカートを履いてストッキングを履いていますが、それは今の私だからできるんですね。トライアルをした話の中でも、なぜスカートを履いたり、お化粧品をしたりしなかったのか。ごく自然な女でいたかった。トータルとして自然でいる自分だと落ちつくだろうけど、似合わない服装をして、自分でそれを見てギョッとしたくないという恐怖感があった。そうなるかと却って自分自身を受け入れられなくなる。自分が「なりたい姿」と目の前に現れる自分が余りに違ってるとよくない。

二つ目の質問。FtMとMtFの転換の過程で決定的に違うことですね。

山路 MtFの場合は、女性ホルモンとか打ち始めても、髭がなくなるわけじゃない。体毛がなくなるわけじゃないんですよ。それはある程度、医療措置で脱毛することが必要です。育ってしまった骨格は小さくすることはできない。慎重が185センチあって背を削ることはできない。喉仏も引っ込むわけじゃない。低くなった声は戻りません。人間は最初は原型は女性ですから、そこに男性ホルモンのシャワーを浴びて男性化するので。逆を考えると、FtMの場合は、女性に男性ホルモンを打つと、育っていくわけなので、喉仏も出てくる、髭も生えてくる。だけでも、途中でホルモンを打つということはFtMの場合、「これは私は違った」と思った時には男性ホルモンをやめますね。逆パターンを歩まないといけない。生えている髭を脱毛して、声は低いまま。つまり不可逆になるわけです。

上川 今、説明したことは医療的なからだの変化のことでしたが、社会的な部分においては、女性が男性に変わっていくことの中で起きる社会との軋轢と、男性が女性に変わっていく時の周囲との軋轢があります。男性が女性側に行く時には

かなりネガティブな反応が強く、女性が普段、短髪で、お化粧をしなくて、パンツルックを履いて、男っぽいのは、嘲笑の対象にならないのですが、男がスカートを身につけただけで、周りの見る目の厳しさは違うということは感じますね。

中村 今の話は錯綜しているんですね。ホルモン投与で身体的にどう変化するか。そこはカウンセリングは必要ですね。自由にやったら不可逆なものを進行させるわけだから、カウンセリングが必要で、本人の十分なレディネスができていないとだめだという話で、セックス、性別の話です。後半は社会的に期待されているジェンダーの話です。それぞれのレベルでリアクションが違ってくる。FtMとMtFの場合の違いはセックスとジェンダーの中の違いがあるということですよ。錯綜しているので整理が必要だなと思って話を聴きました。

関 若い時期に、孤独というか、自分のことを了解してくる人が世の中にいそうにないという時期を過ごした。強くならざるをえなくて生きてこられた。見た目性の性として女性、男性としておられる。もう一方では、世の中の多くの女の人は、世の中のオッサン社会、男性社会に言いたいことが一杯ある。男性も「この頃の女性は」と思っている。そこが入れ変わっている。向こうの世界にも住んでいたという、独特の立場から社会的に女がどんなふうにいるかということを見てこられたわけですね。違う性の場所において、今の男社会、女社会が、どう見えるのか。どんなことを言ってみたくなるのかなど。そんな問いかけに答えられることが何かありますか？

上川 私、考えてみたんですが、一つ、パッと率直な感想ですが、私の中での個の感覚は一貫して「社会的な男性」と見られる状態であった時と、今、「女性に見られる状態であること」と器は違って中身は同じなので、見えている時点は同じなのかなと思います。ただ私の男性として生きていた時期には仕事をしていく上で、周りの期待度、私が周りに示さなければいけない姿勢とか、女性で4年ほど働きましたが、女性としての働く姿勢、周りから期待されることはかなり違うんだなと思っています。私がバカみたい仕事をしたワーカホリックな仕事の仕方は、女性だったら称賛されるかどうか。「そこまでしなくてもいい」という懐疑にとられるのではないかと思います。男時代には仕事をしていて弱音を吐くとか、なかなかできなくて、口には出さずに、やせ我慢でという感

じで仕事をしていましたが、今は女性として仕事をして、本当はできるんですけど、「これ、すみません、わかんないんです」と言うと「しょうがないね。やってやる」と言われる自分がいたりして、うまく使い分けています。私のキャラクター的には後者の方に近くて、あくまでもキャリアを積んで男を伍してやっていくというのは、私のここにはないので、そういう意味では、今が居やすいという域にいるんだなと思います。

山路 私はホルモン剤を打たないで、素のままの女性で、男性的に働いていた時は、すごい男らしかったんですよ。動作からしゃべり方から。典型的な男性を演じていました。それはなぜかという、外見上、男性性が低いので、それを補うために、いろんな男の人を見て、いかにも「男」という人の仕種、しゃべり方、服の着方、考え方を、自分が男性として暮らすために、吸収してやっていました。ところがホルモン剤を打ち始めて、男性化して外側が「男性」になると、自分自身、自然にいられる。「男としてやらないといけない」という気負いが全くない。だんだんソフトになってきて、逆に今の状態の方が物腰が柔らかかかったりします。まず「男性同性愛者ではないか」と仕事場で言われます。今は「男らしくしないとけない」と全然思わない。自分は自分で自然のままでもいい。そんな感じだよ。いつも。前は「男はこうあるべきだ」とガチガチに考えていた。「男はこうしなければならない」と自分の中でも思っていて、自分自身、からだが男性化していくことによって、一枚一枚鎧を脱いでいくように、素の自分になれた。「何も隠さないでいい、男性を演じることをしなくていい」と気づきましたね。

団 そういう感じで「男批判」や男に対して「可哀相」ということか思っていることはありますか？

山路 別にその人がその人らしく表現すれば、それでいいんじゃないですか。社会がどう言おうが、私は私の人生なので、その人が、その人らしく生きていけば。結局、私たちは性自認とか、性のこと、からだのことが人とは違いますよね。世の中では、それは何も考えなくても自己主張している人は一杯いる。その人は頑張って自己主張すればいいし、社会が認めるかどうかということが問題ではないのではないかと思いますけどね。

中村 男らしくする際にモデルはありました？

山路 誰というのはいないですけど。いかにも頭が固そうなおじさんとか。

中村 そういう人が「男性性」のモデルになるんですね。ジェンダーは4、5歳で社会化されていきますが、「男性性」とは何か、「女性性」とは何かということについて、貴重な体験をしていると思います。当事者が声を上げられると面白いと思いますね。そう滅多に会えない人たちですから質問をどうぞ。

質問 立命館大学文学部心理学科です。性についてではなく一人の人間としてどう生きるかということで感激しました。お二人とも最初、自分が思っている性とは違う性で生きていて、自分の場所はここではない。次に同性愛者かもしれないと思う。ゲイのグループに入って違うとか。いろんなことを試して落ちつける場所にたどりつくにはいろんな過程を経てこられた。性についてだけでなく、仕事面においてもどんな人でも、最初に選んだものがその人に合っているとかが、自分らしいものでなくて、いろんなことを経験しないと自分が落ちつける場所は見つからないのかもしれないなと思いました。

上川さんの話を聞いていて、自分に似合わない恰好はしたくなかったから、自然に女性らしい恰好をしたいと思った。私は女として生きているんですが、世の中で、クリクリの巻髪とかきれいなお化粧をしたりすると言うと反発を覚える。仕事の面でも、できないから男性に助けてもらうより、自分でやりたいと思う方です。「女を区別せんといて」と思う方なんです。自分に似合う恰好をする、女らしい、男らしいというのは何なのでしょう？

上川 多分、今、私は表面上、女性的で、最誇張している女性であることを、殊更に言っているように見えるかもしれませんが、私にとって「心地いい」ことを選んでいるだけで「もっと女性らしくあるために、このアイテムが必要よ」ということを別に考えてないんですね。もう一つは、男である、女である、男で働く、女で働くということは、女性の立場で「なんで女性には男性と同じだけの昇進が認められないのか、やっていることは対して変わらないのに給料が違う」「男女雇用機会均等」と言っても何も求められていないじゃないか」ということがあると思います。これは女性に不利な点だと思います。しかし女性が周りから職場で求められて苦しいのと同じように、男性側にも同じように苦しさがあるのだということは何となくわかってきて、男性は男性で、すごく大変ですよ。求められ

るものの大きさ、弱音を吐けない。男も問題を抱えながら言えないみたいな。問題を抱えながら仕事をしていて、男も女も自分にとって「らしく」生きられない。縛られないといけないのは男側にも女性側にも両方あるんだなと感じていて。自分にとって、個のあり方が、男性側、女性側にどちらに近いかは別として、苦しいことはどちらもあるんだなということは、経験上、思います。

村本 一つわからないのは「女のこころ」と表現をされたところです。私自身は自分のからだに違和感はないし、自分は極めて女のこころを持っていると思って生きてきたんですが、大人になってから「自分の考えている女のこころって、世の中とかけ離れているんだ」ということがわかるんですが。その時に「女のこころ」って何なのか。ジェンダーを取っ払うことは不可能なのでしょうが、レズビアン・フェミニストのグループの中で「男と女と二分割をやめて一つにしたらいんじゃないか」という主張をしている人たちがいる。ホルモン剤を打つのは痛いじゃないですか。注射をしたくないし、整形するような感じですから、ない方がハッピーですよ。ジェンダーがなくなって、男、女の分割もなくて、誰でも自分が、こころも、からだも望むようにしていいとなったら、性差はなくなるのか。それとも何か残るのか、どうなのでしょう？

山路 一点、聞いていいです。ジェンダーをとっばらったら、からだを触らなくていいのかというのは、ちょっと乱暴というか。

村本 今の状況はお二人もお若いですが、これから年をとっていく。女として老いていきますよね。ある意味ではプラスではなく、醜いということも自然に受け入れていけるんですかね。

上川 おじさんにはなりたくなかったんですが、お婆さんは甘んじて受け入れようと。もちろん嫌ですよ。若々しくいたいですけど。

中村 それはエイジズムみたいな問題があるわけですよ。そこは違う話ですね。女のこころ、男のこころについてはどうですか。どんなものとして掴んでいたわけですか、それぞれ。

山路 よく聞かれるんですけど、他人にわかりやすく伝えるためには「からだは女、こころは男。それが性同一性障害だ」と言いますよね。個人的には「私のこころの中は、男なのか、女なのか？」と聞かれて「はあ？」と思う。どうなんだ

ろうとわからない。「自分のところが男性なのかな」と思うことは「普通の男性が感じるようなことを自分が感じるから、ここはやっぱり男なのかな」と思うだけで、自分の中で「自分のところは男です」と言えるかどうか。違うような気がする。普通の男性でも、ところの中では女性的な考え方、男性的な考え方は入り交じっていて、でもその人たちは「自分は男だ」と思っているから「俺のからだも、こころも男なんだ」と単純にそう思っているだけ。でも「対峙するところとからだ」を切り離して、突き詰めて考えたら、ここの会場の方に「あなたのところは男なんですか、女なんですか？」と聞かれて、何を根拠に「男」「女」と考えるかというのは、わからないと思いますね、誰も。

上川 もっと逆説な表現ですが、私にとってよくわかっていたのは「男性として扱われる、男性として振る舞う」というのは全然自分らしくなかった。それはやらざるをえなくてやっていただけで、苦しくて不適切な感じ、嘘っぽい。「自分の本来の感情にない感覚を演じてみせないといけない」ということでしたね。自分のものの感じ方や私と彼の言っていることが、性同一性障害を持っている人の典型ではないと思います。それを含んで聞いていただきたいと思いますが、私たちの周りの同じような性同一性障害を持つ当事者の人に聞くと「ガールスカウトに入っている、俺って男だよと思っていた」と言い張れる人もいます。それを否定するつもりはない。本人が言うからそれが正確だとしか思っていない。「あなたのところは女なの？」と言われたら、括弧付きで「女だね」という感じなんですけど、今、女で暮らして、女で働いて、そう言う意識的にとられるかもしれないんですけど、今、自分にとって自然に暮らしているだけです。でもそれも男と女と、はっきりと線は引けないと思いますが、「そのどっち側にいるか？」と言うと「女性側のセンターの方に入るんじゃないの」と思う。今、女性として社会生活を果たしていく中で「あんた、どっち？」言われたら、思わず「女」と答えるだけです。「何を根拠に？」言われても、皆さんが「こころの性」に根拠を求められて答えられないのと同じだと思っています。座標軸を決めていた時期に「縦線のこっちは男性に、こっちは女性で」「端に行く方が色が濃いよね」と。今、女性として社会生活をしていて、いろんな部分での齟齬が収斂されて少なくなっているの、今は自信を持って「女ですよ」と言えるわけです。

中村 村本先生の質問を聞きながら思ったのは、最初に二人が言ったように、TSであることを常にマイノリティの側から説明しなければならない。「なぜあなたは同性愛者なの？」と同性愛者は常に問われるのと一緒にです。確かに違和感として感じるものがあると思うのですが、それは何かとあえて積極的に「説明しろ」と言われると、なかなか難しい。違和感があるから余計に感じるだけの話であって、そうでない人は感じないのでしょうか。余計に説明を求められて、説明されて理解したいと思うんだけど、そのことでまたずれ始める。余計に「女のころ、男のころ」を説明しないといけないことになる。そのことにずれがある。ジェンダー論やフェミニズムのある考え方からすると、女らしさや男らしさにこだわる、つまり社会的に構築された「虚構」のものを説明することを求められるということに陥るのです。違和感としてあるから余計に説明しないといけない。しかし説明し始めると、既存の言葉でその女のころや男のころを語るしかない、つまりジェンダーを再生産していくことになる。そこに論点があるのかなと思って聴いていました。こっちが理解しないといけないことですね。ややこしいですね。

村本 後半部分を聞きたいわけで、それをどう質問したら届くのかよくわからないのだけど。ホルモンを受けたら、より自分らしく感じる。性にとらわれずに自然になれるようになったと。それはホルモン剤を打たなくても、そうなればいいので、ホルモン投与が必要ということは、周囲がもっと自然に女、男と見ることが必要なのか。それともからだ自体の問題なのか。周囲が「男はこういうものだ、女はこういうものだ」というのがあるからこそ、医療による介入が必要なのか。それとも関係なく医療が必要なのかということがわからない問題として残るところです。

山路 答えは簡単です。からだに違和感があるからです。「女のからだ」であることが、嫌なんです。受け入れられないんです、自分に。おっぱいがあることも嫌。わかります？ それって普通の女性が感じますか。何を「普通」と言うかは別にして、足が太いとかではなく、根本的に子宮があるかと、卵巣があるとか、自分が女性のからだであることを自分自身で受け入れられない。違和感があるんです。極端に言うと、私の考えはそうじゃないですが、無人島に行って誰一人いなくても「それでも私は性別適合手術を受けたい」と言う人もいます。手術まで

は受けなくてもいいけれども、社会的に男性として暮らせれば、それでいいという人もいます。胸だけで身体違和が落ちつく人もいます。人それぞれで、どこまで身体違和があるかは違いますが、違和感が激しい人は自殺したりということはありますね。

上川 「想像してください」と言ってもおかしいと思いますが、村本さんが、ペニスがあって、あるからしょうがないと、それで済むのか、髭が生えてきて、声が低くなって、それは女の性格でないという議論を始めても仕方がないと思うんです。自分がどう感じるかは、その立場になってみないとわからない。理屈でこね回すのではなく、不適切感は言葉にならない。今、答えを求められているから一生懸命言語化しているだけであって、それは言語化以前の違和感というか。言語化すればするほど、うまく説明しにくくなる。

山路 たとえば明日、起きたら、ペニスが生えていました。そしたらどう思います？

村本 いきなり変わるわけではなく、人ってあちこち自分の体で気に入らないところとか、場合によっては変形していたりすることがありますね。社会的には嫌だと思っても「しょうがない」という感じで受け入れていく。突然、明日から変わるというのは状況が違う。最初から違和感を持っていて、それを運命と思って、それを前提に生きていくわけだけど、それをあえて医療を受けることは、ジェンダーとか人々の意識が、そうさせているのかなと思うんですが。そこがよくわからない。

上川 それは両者ありますよね。私がサラリーマンだった時代に「女性だと感じています」と言っても、私の姿形を見ると「男じゃん」となる。私が抱えてきた悩みはサラリーマンであった当時も、今も一貫しているんです。姿形が変わってきたから、いくらか緩和はされていますが、中身の抱えているものは変わりはないわけです。「自分らしくある」というのは、からだだけではなく、自分だけでは決められない。人間は社会の中の存在であって、自分が決める性、他者が決める性があって、生きにくさは、からだに対してもあるし、それだけではない。社会にどう位置づけられるか、自分が望む、望まざるに関係なく周りがそれをどう評価するかは自分の生き方に影響してくることで、それを切り離しては考えられないと思う。

村本 皆が生きやすくなるために、解決する方法をどういう方向に求めていくことがいいのか、その答えを知るために、こだわって聞いているわけです。レズビアン・フェミニストのように「男、女という分け方をやめよう」とすれば、解決になるのか。ジェンダーの再生産になりかねない部分もありますよね。

中村 レズビアン・フェミニズムのことから議論はしない方がいいと思います。山路さんが言うように、それは暴力性を感じます。お二人が「違和感」という言葉で表現している事柄と「太っているからだが嫌だ」ということと「チビが嫌だ」ということとは違うと思うんですよ。そういうふうにジェンダーでつくられているのかもしれないけど、そこには質的な差異があるような感じがします。

団 自分が見ている対象として「女の人の胸がいいな」と思うけど「それが自分にあることが嫌だ」という感じね。それって太っているか、痩せている、大きいとか小さいとかではないですね。「それが嫌なら相手も嫌でしょう」とか「女性の胸がいいなら、あなたもそうなるべきだ」という話ではなくて、「見ているのはいいけど、自分がそうなるのは嫌だ」というのは主観的だけど、非常によくわかる感じがあります。男の人もそうだし、女性もそういう感覚があると思う。そのところが意識の問題とは違って、からだという環境の上に「男である」「女である」という、自分が乗っている環境が、どんな環境かということのフィット感は、確かにあるのだろうと思う。それは社会的ジェンダーとは別かなと思って聞いてたんですけど。

中村 面白いですね。

上川 面白いですね。

中村 カミングアウトしたTSの人に初めて会ったのは虎井まさ衛さんという人です。山路さんと同じパターンです。その人から手紙をもらった。僕が「男性性」「男らしさからの自由」とか言っていたので「私は男らしくになりたいので、あまり男らしさからの自由とか言ってくれるな」という話だったんです。「なるほどな」と思って。私は「男性性」と「暴力」の問題をやっているものだから「男らしさ」のネガティブなところに行っているけど、彼は「男らしさのポジティブなところを言ってほしい」と。「ジェンダーの話も見る視点によって違うんだな」と思った。ジェンダーの話だけではうまくいかないものだということを感じさせてくれたの

がこのグループであるし、TSの方たちの活動だった。レズビアン・フェミニストに感じた強引さも、ジェンダー論の首尾一貫性として話をつめていけば、その主張は正しいのかもかもしれません。確かに成り立つ論理です。そこの整理が僕もまだできてないなと思っています。私の中でも答えは出ていない。言語化できないテーマなんです。言語化することを、お二人こに求めても変な話で、違和感を感じない人たちも、「男のころとは何か、女のころとは何かを説明しろ」と言われても無理ですよ。同じ地平に戻ってしまう。

質問 立命館大学院生です。こころの器の話については想像しきれないものだなと思って聞いていました。私は違和感がないので。ホルモン注射をして緩和されたという話ですが、整形とは違うものだと思います。ホルモン注射をして、さらに葛藤が生まれるということが一方であったりすることもないのかなと思ったり。器に対する違和感が全くなくなることは多分ないのではないかなと思うんです。だからこそ、ホルモン注射をすることで、緩和される面と新たな葛藤が生じないのか。根本的に違和感はなくなるのだから。自分自身でOKだと引き受ける。まるごとの自分を受け入れたいと思うのですが、ホルモン注射によって緩和されるが、また新たな葛藤は生まれないのかどうか？

中村 今は相対的には上川さんは違和感はないんでしょう？ それなりに落ちついているわけですか？

上川 医療を受けることへの問題はありますが、自分にとってはプラスです。

山路 私は胸の除去手術も受けています。世の中に言う性転換手術、性別適合手術、子宮、卵巣をとってしまっています。たとえばペニスをつけたとしたも体に対する違和感は死ぬまでなくなるだろうかと、それは思っています。「最初から男性のからだを持って生まれていればよかったのにな」というのが正直な気持ちです。所詮、ホルモン剤を打ったり、胸をとったり、ペニスをつけたりしたとしても、つくりものだという感覚はありますよね。違和感は一生涯続くのではないかという苦しい思いは続くでしょうね。軽減はされるでしょうけど。

中村 医療的には軽減可能ですね。後は社会生活、心理的な違和感もありますよね。TSの人たちも一枚岩ではないので、いろんなパターンがあると思います。

TSとTGを支える人たちの会に何回かお邪魔したことがあります。実にいろんなテーマがあります。弁護士を呼んだり、精神科医を呼んだり、心理士を呼んだり、語ったり。くめども尽きぬ話が出てきますが、やはり戸籍法を変える必要があります。そんなことも含めて、最後の時間でアドボカシーの話をしていただけますか。社会制度への違和感もありますね。

上川 たえば皆さんに「運転免許証に性別欄がありますか？」と聞かれて答えられる人がどれだけいるか。運転免許証には性別欄がないんです。名前と住所です。私たちが身分証明をしようという時、身分証明が可能なのは運転免許証だけです。私も彼も自分にとって自然な性で生活しているわけですが、戸籍上の性別を変えられる道はまだ開けていません。1980年に一例あるだけで、一昨年から6人が公的に数年ごとに訴えています。望む性で働き、社会生活に従事することを、第三者の精神科医複数に証明してもらおう。全額自費の治療を受ける。アルバイトのお金で。そこまでやって生活している人が、3件続けて「性別の訂正が否定」されました。高裁に抗告中ですが、私たちが死に物狂いで得てきた生き方と、社会的に与えられている私たちの「男」「女」という1文字は、そこに狂いを生じています。

ここから何が起きているか。身分証明が難しい。私は運転免許証を持っていない。レンタルビデオの会員カードをつくるのも大変です。本人かどうか、トラブルんです、性別欄で。書類上の齟齬が生じるために仕事はまずアルバイトから探す。安定した仕事を探したいのですが、アルバイト、パートからしか探しようがない。カムアウトして正社員にと思っても、それを超えて採用してもらうのはなかなか難しい。雇用だけでなく、住むところを探そうと住民票を持って不動産屋に行くとトラブルります。具合が悪いから保険証を持って医者に行くんですが、医者にかかる前にトラブルんです。「人の保険証を使わないでください」。私たちが自分たちらしい生き方を模索することをとらえて「恣意的に個人の勝手な感情で性を選んでいる」と思われるフシがある。享乐的な自己選択と思われんですが、こんな不利なこと選択するなんて、ダテや酔狂で、できないことなんですね。

家族と縁を切ったり、勘当される人もいます。周囲との関係に軋轢を生じて、住むところもなく、働くところもなく、医者にもかかれず、いつも不安定なんで

す。こういう事情があるんですが、私たちにに対する偏見が世の中にすごくある。偏見が強ければ強いほど、「おかしい」とこの状態に声を出すことによって、今の脆弱な基盤制度も失いかねない。抑圧があるところの人たちは声を上げることすら難しい。そういう隘路にはまってしまう。そこらか何か変えていかないといけないと思っています。

「Trans-Net Japan」というのは私たちも属している組織ですが、1996年につくられました。埼玉医科大学が「この問題を医療の問題として取り上げるべきではないか」と、長い間の悲願を経て、初めて大学が認めてくれたわけです。その時、発表する現場にマスコミがたくさんきたんですが、そこに当事者は全然いなかった。私たち当事者にとってこそ大事な情報なのに、当事者が介在できないのはおかしいと、主宰の者が立ち上げたんです。今、2,000名くらいの当事者が参加しています。全国津々浦々、薄い層で、薄い割合でいるということですが、現状は医療への手助けが、国内で2か所のジェンダークリニック、性別適合手術までやるところは国立大学は岡山大学医学部付属病院と埼玉医科大学の2か所です。

受け皿があって、じゃ解決なのか。そうではない。社会的にいつも「男」か「女」かという一文字を問われて、社会制度がしっかりできていればいるほど、狭い道しか生きる道がないという現状がある。医療の手助けがあるように見えますが、北海道の人がウカンセリングを受けたいと思うと、精神科医とか臨床心理士の人がOKと言わなければ先の治療に進めない。門番の治療も数年間やらないといけない。それさえ北海道では受けられないので、月1回、アルバイトのお金を工面して爪に火をともしような生活をして、東京の精神科医の元に飛行機で来る。精神科医もアップアップしています。専門の精神科医は十指に足りない精神科医しかいません。当事者は門戸を叩いても、診てもらえない場合があります。精神科医だけに限らず、一般疾患で病気になっても、ちゃんと取り扱ってくれないところもあります。上から下まで見られて、観察された上で、やっと医療の診察を受けるような苦しさを抱えています。

こういう現状を皆さんに知っていただきたいと思って活動しています。お力添えをいただければと思います。

中村 社会制度上はもっと違和感がある。医療もようやくですが、保険が効かな

かったり、自費だったりという側面があります。もともと脆弱な基盤しかないのに、履歴書のいらぬ仕事にしかつけないんですね。仕事に限られてきます。お話をされたように、日本語の場合、性別で言葉が違います。「僕は」、「私は」という第一人称が名乗れないということでした。「主語がない！」のです。女性性、女性らしさ、女のころがあるので、「俺」と言えないということでした。でも身体は「俺は」ということを強いるのです。あるいはその逆ですよ。第一人称で自分を語れないのは辛いと思います。「自分が何者か」を名乗れない。その象徴としての戸籍法が変わらない。裁判で性別変更を認められない。そんな領域をまとめたアドボカシー、当事者の権利をどう守るか。違和感を感じない人たちの偏見もありますが、制度の問題も大きいですよ。そこに向けて活動が展開されていることになるとしますので、関心を持ち続けたいなと思っています。

「紡ぎなおしの物語を聴く」というタイトルを、上川さんは「それは私にぴったりのテーマだ」と言われました。「性を紡ぎなおすという経験をしているので、ぜひ話をしたい」と快諾されて京都まできていただいた次第です。性を紡ぎなおす、「性の移行」という話をされましたが、とてもよく、そのことが出ていたかなと思います。

上川 いろいろ話をしながら頭が一杯で、こんなにたくさんしゃべりながら、言葉にして伝えていくのはすごく難しく。これは自分自身にも問い掛けないといけないことですが、相手の立場に立って考えるということは、人の姿勢としてあるべきだという面は共通した見方かもしれませんが、かなり限界があるだろうし、でも私は自分らしさを認めてもらいたいから、人も認めたいと思っていて。この経験を何かプラスの方向につなげていきたいと思って、今、考えています。

山路 「性同一性障害者」という言葉は問題があるので、今では「性同一性障害を持つ人」と言ってるんですけど、別に特別な存在ではなく、逆に私のように、何も言わないで男性として働いている人がいて、あなたの職場で一緒に飯を食ったり、酒を飲んだりして、感想を言い合ったりする、ただ気づかないだけ。特別変わった存在かという、それはどこにでもいる皆さんと変わらない。感じることもそうだし、きれいなものを見てきれいと思うころも他の人と変わっている

わけではない。自分自身の性自認というところが1点だけ違うだけで、後は全然変わらない。ただの普通の人なので、そういうことをわかっていただきたいと思います。いろんなところに来て話をするのですが、なぜ話をするかという、普通の人は、自分の知らないことに関して怖いと思う。怖いと思うから心ないことを言ったりする。それは知らないから言うのであって、私も上川も、たくさんの人に知ってもらいたい。すべてを伝えられるわけではないですけど、あなたたちと特別、変わったところはない。同じ人間だということを知ってもらいたいということだけです。

上川 私たちから見て、他の聞いていただいている方と変わらないということは、視点の置き方が違うだけだと思います。私たち当事者を他者から見た時、私が男なのに女に変わるっていうのは、座標の根っこを男でないところにおいているからで、個人の感情は自分のところから発するもので、自分の座標軸はそこにしかない。私たちの視点から見て、私たちが望んでいることは「こことからだが一致して欲しいよね」「能力や意欲に応じて仕事をしたいよね」「医療機関にも安心してかかりたい」「家族も持ちたい」「好きな人がいたら結婚もしたい」という、そんなに変わったことを言っているつもりはないのに、こと「性を変える」というところだけに着目して、相違点ばかり見て、相似点を見落としがちな議論になってしまうことを感じています。もっと同じところに着目してくださると、もの見方も違ってくると思います。

中村 貴重な話だったと思います。ずいぶん和我々の無知がわかったし、でも話をしないとわからない。話をすれば違いが目立つ。こんなやりとりの中で変化していくのだと思います。どうもありがとうございました。参加者の皆さんもありがとうございました。